

## 令和3年度 奈良県スポーツ推進審議会定例会 議事録

- 1 開催日時 令和3年5月28日（金）10：00～12：00
- 2 開催場所 奈良県庁第一会議室（大） 【WEB会議】
- 3 出席委員 佐久間会長、根木副会長、朝原委員、伊藤委員、尾崎委員、千葉委員、福西委員、松下委員、中西委員、田中委員、蝶間林委員、並河委員、星野委員、松永委員
- 4 欠席委員 川手委員

〔棕本課長補佐〕

大変お待たせいたしました。ただいまから令和3年度奈良県スポーツ推進審議会第1回定例会を開催いたします。本会議の進行は、奈良県スポーツ振興課の棕本がつとめます。よろしくお願ひいたします。本日は、新型コロナウイルス感染防止対策として、WEBでの開催とさせていただきます。それでは開会に際しまして、奈良県文化・教育・くらし創造部長の吉田より、一言ご挨拶申し上げます。

〔吉田部長〕

昨年度の定例会は2月に開催させていただきました。これまでの我々の色々な取組につきまして、様々なご意見を頂戴したところでございます。その後4月に入りまして、聖火リレーを本県では4月11、12日と、大変厳しい状況ではございましたが、当初の予定どおり県内19の市町村におきまして開催させていただいて、無事終了したところでございます。

本日は、これまで色々取り組んでいるところにつきまして、改めて過去を振り返ると同時に、令和13年に奈良での国体も決まりましたので、それに向けて今後どのように進めていくのかというようなことをご議論いただきたいと思います。と思っております。

とは言うもののまだまだ色々な課題が残っていると認識しているところでございます。前回の審議会でもご意見を頂戴したところではございますが、昨年からの新型コロナウイルス感染症により、様々な分野において大きな影響があります。スポーツについても同様でございます。それらを踏まえまして、先ほど申し上げました10年後の国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会の開催、あるいはそれを機に、新たなスポーツ振興を考える機会として捉えて、我々の方針や、スポーツ振興に関する条例やビジョン、そういったものを検討したいと考えているところでございます。

本日は、本県がスポーツ振興として取り組む柱と目指すべき姿につきまして、委員の皆様方に、様々なお立場からご提言、ご意見を伺いたいと思っております。と思っております。

本日はWEBでの開催というところで大変進行がしづらくございまして、皆さま方にご意見を述べていただくのも大変かと思いますが、限られた時間ではございますが貴重なご意見、色々な方面からのご意見を賜ればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

〔司会〕

会議資料、次第等の説明、委員の紹介、審議会条例説明及び議事録等の公開について説明

〔司会〕

それでは議事に入る前に、会長の選任をお願いしたいと思います。審議会規則第3条の規定に基づき委員の互選によって会長選任することとなっています。委員の皆様いかがでしょうか。会長の選任をお願いします。

〔福西委員〕

福西です。

〔司会〕

はい、福西委員をお願いします。

〔福西委員〕

前回の審議会で会長になっていただいた佐久間委員に出来たらお願いしたいと思うんですけどもいかがでしょうか。

〔司会〕

それでは佐久間委員、会長お願い出来ますでしょうか。

〔佐久間委員〕

はい、よろしく願いいたします。

〔司会〕

ありがとうございます。それでは佐久間会長からご挨拶をお願いしたいと思います。よろしくをお願いします。

〔佐久間会長〕

はい、ただいまご指名いただきましてありがとうございます。本日も定例会の進行を務めさせていただきますと思います。

本日検討すべき案件といたしましては、事務局よりお送りいただきました新たなスポーツ振興ビジョンの策定と、それから、その成果を具現化するといってもいいと思いますが、令和13年開催予定の奈良国体、その時には全国スポーツ大会の名称になりますが、これらの目指すべき姿、あるいは柱等について、ご検討いただきたいと思います。

現在進行中の10カ年のスポーツ振興計画の目指すべき姿として、今までやってきました

けれども、「いきいきと安心して健やかに暮らせる健康長寿奈良県」といった基本理念の目指すべき姿になるわけですけれども、こういったことも踏まえて、今後ご検討いただきたいと思っています。それぞれ、ご専門の、発想豊かな委員の皆様方のご協力をいただいて、本日の会議の課題を達成したいと思います。どうぞよろしくご協力の程お願いいたします。

〔司会〕

ありがとうございます。それでは佐久間会長の進行により副会長の選出をお願いいたします。

〔佐久間会長〕

はい、それでは副会長選出をさせていただきます。選出におかれましては委員の皆様方よりご推薦いただくことになっておりますが、前副会長の根木委員にお願いしたいと考えておりますけれども皆様いかがでしょうか。

はい、ありがとうございます。それでは根木委員、副会長よろしくをお願いいたします。

〔根木委員〕

はい、よろしく申し上げます。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございます。では、早速議事の進行に移りたいと思います。議事に先立ちまして議事録署名の委員お二方を指名させていただきたいと思います。恐れ入りますが、蝶間林委員と福西委員にお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

〔福西委員〕

はい、よろしく申し上げます。

〔蝶間林委員〕

はい、よろしく申し上げます。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございます。先ほども申し上げましたけれども、本日の審議会につきましましては、各委員の皆様方には出来るだけ多くのご発言、ご意見をいただきたいと考えております。委員の皆様方よろしくお願い致します。

では、お手元に配布してあります議題、新たなスポーツ振興ビジョンの策定と、令和13年開催予定の奈良国体の目指す姿について、これを事務局より資料を元に説明していただきたいと思っております。事務局よろしくお願い致します。

〔木村スポーツ振興課長〕

皆様おはようございます。スポーツ振興課の木村です。本日よりしくお願いします。

それでは私の方から資料4に基づきましてご説明させていただきたいと思います。資料4をご覧ください。本県のスポーツ行政でございますが、平成20年にスポーツ行政の主管が教育委員会から知事部局に移管しまして今年で12年目となります。この間、国の方では平成23年にスポーツ基本法が施行され、また、平成24年にはスポーツ基本計画が策定されました。本県におきましては、その翌年の平成25年に奈良県スポーツ推進計画を策定しました。県の計画は、平成29年度に中間見直しを行いまして、現在の計画は平成30年度から令和4年度までの期間となっております。知事部局の移管後は、スポーツ推進計画の策定後、計画に基づきまして、これまで様々な取組を行って参りました。実施内容ですけれども4枚目の添付資料の参考資料1をご覧くださいと思います。

主なものを幾つか紹介させていただきますが、総合型地域スポーツクラブの育成、幼児運動スポーツプログラムの策定、県民のプロスポーツ試合の観戦機会とか、ネーミングライツを活用した施設の改修や機能向上、あるいはイベント系では奈良マラソン、サイクルイベントの実施、先ほど部長からもありましたように、直近では先月に県内で聖火リレーを実施いたしました。

また、現在では2022年のワールドマスターズゲームズ2021関西、これに向けて準備をしているところでございます。また、何度もお話しに出ておりますが、令和13年に奈良県で2巡目の国体が開催する予定をしております。このように、これまでも、色々な取組を行って参りましたが、まだまだ課題はあると認識しております。

資料1ページに戻っていただきまして、前回の審議会でも各委員から今後の検討課題といたしまして、運動習慣率を上げるための、運動・スポーツに無関心な人へのアプローチ、スポーツの習慣化のための幼児期からの運動、スポーツすることが重要である、都市部と山間の地域性を踏まえた取組の検討、あるいはコロナ禍において心身の健康維持の為に日常的な外出などの身近な運動の重要性、イベントの制限がかかる中で、リアルとバーチャルを組み合わせた新しい取組、こういった、多数のご意見をいただいたところです。この他にも、スポーツ推進委員や指導者の高齢化、次世代の人材不足でありますとか、県や市町村におきまして、公立スポーツ施設の老朽化、機能不足ということも課題になっております。その他、競技力の強化におきまして、いわゆる仕組み作りがしっかり出来ていない、こういった沢山の課題があると認識しております。

これまでの取組と、そして、今後まだまだ取り組んで行かなければならない課題を踏まえまして、今後の奈良国体開催までの10年間と、またその後を見据えて奈良県がスポーツを通じてどのような未来を目指していくのか、というようなところを条例やビジョンで示していきたいと考えております。併せまして、国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会の開催を機に、本県のスポーツ振興の基盤作り、仕組み作りというものをもう一度考えまして、更なるスポーツ振興に繋がるような、そういった国体を目指したいということも考えてお

ります。

本日、委員の皆様におきましては、それぞれの専門的な立場から、本県が目指すべき方針、柱、こういったものについて、ご意見をいただきたいと思っております。

資料4の3ページに案として示しておりますのでご覧いただきたいと思います。中段に記載しておりますが、方針のいわゆる柱ですけれども、スポーツを通じた健康増進、スポーツを通じた人づくり、スポーツ環境の整備と地域の活性化、あるいは、国体を契機とした、あり方、目指す姿でございますが、人づくり、組織づくり、環境づくりと、これは一つの例として、お示しております。

この柱につきまして、本日いただきますご意見をもとに、次の審議会までに、県の方針案などを固めていって、また改めてご意見を聞かせて頂きたいと思っておりますので、本日もどうぞよろしくお願いいたします。私からの説明は以上です。よろしくお願いいたします。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございます。ただいま事務局から、ご説明いただきましたけれども、これらを基に奈良県がこれまで様々な取り組みをやって参りました。そしてまた、資料4のところがございますように、色々な課題も残っております。こういった現状も踏まえまして、令和13年に国体開催が予定されております。従って、そこにつなげる意味でも、今後10年間のその姿をどういうふうに捉えていったらいいのか、奈良県のスポーツ推進の方針とか柱について、各委員の皆様方から、色々ご意見等を頂戴したいと思っております。

その場合の観点といたしまして、今の資料4の3枚目のところの例などを参考にさせていただきたいと思います。特に、課題とか、あるいは進行の順序とか、そういったのは、考えておりません。繰り返しになりますが、まずは、色々委員の方々からご意見を頂戴して、それらを次回までに集約していきたいと思っておりますので、ご遠慮なくご発言願いたいと思っております。よろしくお願いいたします。

特に、昨年度残した課題等も、多々ありますけれども、その中でも、体力の低下とか、運動の実施率、そして、少子高齢化、更にスポーツ支える人、よくスポーツ見る人、行う人、支える人と言った書き方がされておりますけど、こういった課題とかですね。それから、現在進行中のところでもありますけれども、施設の問題。競技力、強化の仕組みとかですね。現有施設の老朽化、こういったことなんかも考えていかなければなりませんし、当然それは運営するシステムや組織についても考えていかなければなりません。昨年から今年と、まだしばらく続くと思いますが、コロナ禍においてもスポーツの取り組み方なども問われておりますけども、その中で、新しいスポーツの将来を考えるようなものが出てきつつあるのかなとも思われます。こういった課題も踏まえまして、自由に、各委員の方々からご発言願いたいと思います。

松永委員いかがでしょうか。

〔松永委員〕

はい、ご指名いただきました松永です。よろしくお願いします。

前回の任期の最後の会議でも、今ご説明があった内容、あるいは佐久間会長のおっしゃった内容について少し触れられていたと思います。奈良県のエリアについて、先程のご説明にもありましたが、都市部と山間部とでは、かなり問題・課題も違っていると思います。そのエリア毎、主に町村部、特に村になると、また条件も色々異なりますし、課題も違います。前回、デジタル化の話等もさせていただいたと思います。さらに。市レベルの話の中でも、市町村合併後に市となった旧町村エリアによっても状況がかなり異なってくると思います。奈良県の地域特性の各問題・課題というところもしっかり整理をした上で、そのエリア毎の10年後の将来予測ということはこの会議の中でも検討していく必要があるかと思っております。ちょっと大きい枠組みからで申し訳ありません、よろしくお願いします。

〔佐久間会長〕

ありがとうございます。それぞれ市町村の抱えておる現状、例えば過疎化とか色々ありますけれども、そういった地域特性を十分考えて進めていく必要があるということでのよろしいでしょうか。

〔松永委員〕

そうですね。特に前回も過疎の話をしらせていただき、長野県の過疎の村の事例を挙げさせていただきました。特に過疎の村と、例えば奈良市では状況が全く異なりますので、エリア毎に大きく分けて地域特性を見ていく視点は必要かと思っております。以上です。

〔佐久間会長〕

いわゆる様々な、最小単位のコミュニティの形成とか、そこでスポーツを中心に、どのような展開のされ方を考えたら良いかという問題でしょうか。そのように捉えてもよろしいでしょうか。

〔松永委員〕

そうですね。コミュニティもそうなんですけど、コミュニケーションの取り方というところで、コロナ禍においてデジタル化がかなり進んでいると思うんです。前回申し上げたんですが、例えば山間部、過疎が進んでいる地域では、オンラインというのはかなり有効に活用できると思いますし、指導者の派遣等もオンラインでも出来ます。ICTを使ってということも可能になっていくと思うんですが、一方で、やはり山間部特有のWi-Fi環境等の電波自体がまだ届かないというような状況もあります。

前回までの会議でも議論があったかもしれませんが、この部局だけではなくて、奈良県の他の部局、まちづくり関係やデジタル関係の部署も含めた取組みを展開していく必要がある

と思っています。つまり、奈良県さん全体のデジタル化というところが大きなキーワードになってくるかなと思っています。以上です。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございました。デジタル化という点では、非常にこれも大きな地域差もあるかと思いますが、そういった問題を含めまして、特に今、地域差、あるいは過疎化ということで出てまいりました。前回も、色々ご意見頂戴しました伊藤委員、いかがでしょうか。今の発言を受けまして、あるいはまた、新たに地域的な側面、こういうふうな編成で展開できるのではないかとか、そういったことを教えていただければと思っています。よろしくお願いします。

〔伊藤委員〕

御杖村の伊藤です。

うちのような、過疎で学校や競技する人口が少ない、施設もあまりないという中で考えますと、近隣の市町村と合同で、いろんな施設を使っていくということも必要ではないかなというふうに思っています。例えばうちの場合ですと、今回、小中学校の一体化しているんですけど、その中で例えばプールは、負担を考えると、独自でするよりも、近隣の市町村のプールを利用させていただくというようなことも必要ではないかということで、今回は隣村との利用を進めさせていただいているところです。そうしたように、村独自というよりも、近隣の市町村と協力しながら、スポーツ推進に取り組んでいくということが必要ではないかと思っています。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございました。非常に地域特性と言う面で、学校、それから、所有施設等を、連携しながら合理的に運営、推進していくことの必要性について、かなり先進的な取り組みを行っておられ、特に学校、大学等とも連携しておられる天理市の並河委員、いかがでしょうか。

〔並河委員〕

はい。今の松永先生と伊藤村長のご発言も含めて、今後、目指すべき方針の柱の部分について、若干意見申し上げたいと思います。健康づくりと人づくり、こういった点も地域差に関わらず、非常にスポーツの正しい役割として大事だということに加えて、コロナの中で、やはり孤立されている方が増えてしまったり、あるいは今後、絆作りっていうところをしっかりと改めて進めていけないといけないという点からしますと、地域社会を再構築していく上で、スポーツの役割という部分も、一つの柱としては、大事なのではないかなというふうに思いました。スポーツを通じて交流することで、お互いに支え合えるような関係をしっ

かり作っていくべきだと。

その上で、施設についてもやはり非常に重要だというふうには思っておりまして、伊藤村長から仰っていただきました広域の施設利用については、本市は磯城郡、山添村さんと定住自立圏というのを組んでいて、今すでにお互いの市町村民がスポーツ施設を相互で使うということをやっております。こういうことをさらに進めることを、県全体でやっていければ良いのではないかと。また、佐久間会長が仰った人材が、本市でしたら天理大学を中心にいます。デジタルの面も含めて、奈良県内の色んなところに各競技人材がいらっしやると思いますので、それらをデジタルも使って繋いでいくような取り組みというのがあれば、全体としての底上げに繋がってくるだろうと思っております。

デジタルの環境ですけれども、本市も盆地部と山間部とあるんですが、ケーブルテレビと合わせて光回線については県全体でもうすでに進んでいるので、しっかりと対応できる場所はあるというふうに思っています。以上です。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございます。いわゆる ICT の活用、あるいはデジタルデバイスの活用をしながら、繋がっているのを含め、コロナ禍の中におけるスポーツの役割についてを述べていただきました。現実問題として、朝原委員にお尋ねしたいのですが、今、スポーツの現場でご指導なさっておられて、コロナ禍で特に工夫されたようなことがございましたら、お聞かせ願いたいと思います。朝原委員よろしく願いいたします。

〔朝原委員〕

今、私はトラッククラブ (NOBY T&F CLUB) を運営させて頂いているのですが、その活動場所、場所で、開催 (指導) 出来るところと出来ないところが出てきています。大阪市の施設、ヤンマースタジアムはもう閉鎖ということで、開催自体もできない状態です。京都光華女子大学でも、学校の判断で中止ということになっておりますので、エリアエリアで対応格差というか、出来るところと出来ないところの存在が、今の課題点と思います。

ただ前回のような、長い間、3、4ヶ月の中止ということは、この先あまり考えてなくて、開催したり、中止したりのような事はあるかもしれないのですが、ある一定の期間は、開催出来る状況で、開催出来ない間は、何かしらの対策をしないといけないなと思います。何か逆にすごくやりにくく、休みなら休みで、オンラインのサービスであったり、色々考えた方がいいのですが、なかなかリアルとオンラインが交互に、出来たり出来なかつたりするので。とはいえ、これからの時代は、リアルなことだけじゃなくて、オンラインのサービスも考えていかないといけないと思うのですが、費用も掛かります。コンテンツも色々、オンライン用に考えないといけないので、コーチたちや事務局とも会議はしているのですが、採算性を考えると、継続して活動するのは、結構難しく、初期投資もかなり必要になるという印象です。

もうひとつ、全然関係ないのですが、この10年後と、10年先を見据えた奈良県のスポーツ振興ということで、目指すべき方針が出されていて、やはり国体が結構大きな起爆剤になると思っています。これまで国体っていうのは陸上選手も同様なのですが、教員枠とか、地元の企業に国体要員として雇用される等、競技強化だけじゃなく、指導者の確保であったり、雇用の確保であったり、様々な意味合いがあったと思います。今後10年で国民スポーツ大会がどういう位置付けになっていくのかは私自身すごく興味があって、奈良県さんが新しい国体の形ということで、施設を上手く利用しながら、国体が行われることによって、国体と関係のない一般市民の方にもスポーツが普及されていけば、奈良県のスポーツ振興の一つの新しい形というのを提案出来、存在感を出していけるとと思います。具体的に何かと言われると、今は思いつかないのですが。そのようなことを考えていました。終わります。

〔佐久間会長〕

ありがとうございました。ただいまの朝原委員のご意見の中でもありましたけれども、国体の新しい姿、位置付けの中に、何か特徴を出せればということで、その中の一つとして、一般市民の参加ということでした。施設の問題、選手の育成、あるいは指導者の養成の問題等も絡めて、検討すべき課題として、ご提言いただきたいと思っております。

〔蝶間林委員〕

いいですか。

〔佐久間会長〕

はい、どうぞ。

〔蝶間林委員〕

蝶間林です。今の、朝原さんがお話をされた10年後の国体を見据えてということもあるんですが、基本的には、奈良県民の健康な身体と心を、育成するということには、無関心な人へのアプローチをしたり、子どもたちのことを考えたりしていくということだと思えます。スポーツってのは気晴らしっていう意味ですから、運動というふうに限定することはないと思えます。やはり、人間は動物ですから、動くってことがとても大切だと思って、その動くための場所が、家庭と、学校と、地域社会と職場を含めてですね、三つあると思えます。その中で、自分で簡単に出来るような運動を県の方でもっと広報して、たくさん優秀な指導者を作って、色んな所で、色んな場所で、気軽に一般人がスポーツの指導を受けられるような、そういう場所とシステムを作っていくことが大事かなと思えます。

僕も大学で親子テニスをやってるんですが、親も結構忙しいですから、祖父母と3代にわたって、子どもの教育と、高年齢の祖父母が、そういう子供から影響を受けて健康に目覚めるということが、やはり10年後の国体にも続いていくんじゃないかなというふうに感じま

した。以上です。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございました。現在続いております推進計画の基本的な理念と申しますか、目指すべき姿と関係しますけども、「生き生きと安心して健やかに暮らせる健康長寿奈良県」、これはもうまさにある意味で不変的なものだと思っています。

さらに、対象者をしっかり踏まえた上で、「誰もがいつでもどこでも」という基本目標の細部に至って検討も必要かと思っています。特に学校とか、地域の様々な施設の活用。そして、指導者の育成という点が検討すべき大きな課題ということで、ただ今の蝶間林委員のお話はよろしいでしょうか。

〔蝶間林委員〕

はい、具体的にはプランクチャレンジとかありますよね、体幹を鍛えるような。家庭でもできますし、子どもとおじいちゃんおばあちゃんが一緒にやったっていいし、そんなものからの具体的な例を県が示していったほうがいいかなと。

〔佐久間会長〕

ありがとうございました。それでは、いろいろな対象の人たちを指導なさっておられる福西委員、お願いいたします。

〔福西委員〕

ポルベニルの福西です。はい、前回の審議会からの引き続きということでいけば、やはりいろんなイベントがたくさん奈良県にもあります。私も知らないイベントもたくさんあって、それが県内県外に対してまずどれだけ周知されているか。今やってるイベントだけでも相当の数を地域でやっておられるので、その辺を先ほど言われたITであったり、SNSであったり、そういうネットの世界をもっと活用して、まずは周知すると。今やってるイベントだけでも相当、また変わってくるのかなというのが、全体としてまずあります。

二つ目は我々のクラブは、サッカー中心なんですけど、幼稚園から50歳以上の年齢までと、アスリート、プロを目指す選手たちと、そのぐらいの幅で、活動をしています。スポーツもやはり、アスリートを目指すっていうところと、あと、生涯スポーツであったり楽しんだりということで、二通りありますが、そこでいつも、我々がぶつかるのは、千葉さんがいつも言われている指導者の不足と、指導者の教育という面です。アスリートを目指すというの必要ですけども、就学前の子どもたちにスポーツの楽しさを教えるという指導者と二通りいて、一つの指導者なんです。ちょうど医学的な知見で田中先生もいらっしゃいますが、私がぶつかるのは、指導者のやり過ぎであったりとか、アスリートを見る時に本当の意味で、医学的な知見がどれだけわかって指導しているかということ。予防医学や、年齢別にどうい

うことをしたらいいのかというのは、各地域や団体でできるものではないので、やはり県レベルで、もっと医学とも連携して、いろんな取り組みをやっていただければ。指導者も、数を増やすというだけではなくて、質を高める機会を増やすということ、やっていただければなど。

あともう一個ですが、資料で推進計画の状況ということで目標指標として、総合型スポーツクラブの会員数であったり、そういうのが載っているところですが、これ、平成25年から令和元年までの資料が載っているんですが、例えば、総合型イベントの参加数でいくと、平成24年の1000人から、令和元年までで8000人。約8倍の数になっています。あと、会員数も1万人から1万6000人になっています。県や国の施策として出されたものだと思いますが、非常にその数字が上がっていて、実際に地域で活動されている。先ほど地域格差ということでもいろいろ言われていましたが、地域でも総合型というのはかなりできていると思います。そこがどれだけ地域にアプローチをかけられるかであったりとか、積極的に県からもサポートがあったり、勉強会やイベントをどんどん任せていくということで、もっとも総合型が自力をつけていければ、県全体へのアプローチとして、この数字を見ても、子どもが減っている中で、会員数、イベントの数、イベントの参加数は上がっていますので、ぜひこの辺は力を入れていただければと思います。

あと、10年後の国体ということで、ここに県の例として、柱ということで「人づくり」、「組織づくり」、「環境づくり」ということで、先ほどもお話をさせていただきましたが、「人づくり」については、僕は総合型なのかなと思うんです。

「組織づくり」というのは、私らが今まであまり携われなかったところでは、医学的のところ、そういう組織がどこかにあれば、我々としてはアプローチをかけやすい。「環境づくり」ということで国体のところにもかかってくるのかなと思うんですが、今の環境をより良くする。だから朝原さんが言われたように、組織、環境づくりなんかでも、そこを本当によくわかった方々に管理運営をしていただくであったりとか。

あと、先ほど指導者が不足してるということで、陸上に限ったことになるのかもしれませんが、今回の国民スポーツ大会のイベントでもしそういう施設ができるのであれば、専門家の人に聞かないとわかりませんが、指導者の不足したところを補えるような、たとえば、陸上の競技会をやるときには非常に多種目なので、多くのスタッフや審判が必要になる。奈良県の陸上関係の方に聞くと、そこが集められないから大きな大会が開催できないというようなことを言われている方がたくさんいらっしゃいます。そこをもし新しくできた施設で、多数開催しやすくするのであれば、松下委員はプロフェッショナルになると思いますが、ITを使って、デジタルの世界で、いろんな数値をもっと自動的に計れるような施設にしたり、審判団の代わりを機械がすると、運営する側の人数も減る。奈良県内でも、指導者が少ない中でも大きなイベントの可能性を出せると。ちょっと長くなりましたが、現場として、今、感じていることです。そういうところにアプローチをかけていただければというのが、今私の感じるところであります。以上です。

〔佐久間会長〕

ありがとうございます。

いろんな観点からのご指摘いただきましたが、特に最初の方に触れられた指導者問題で、指導者の質を高めるといふか、専門性をもっと高めることの必要性。さらにイベントの周知をしていくような方策としての ICT の活用の方法とかがあげられました。福西委員からの観点では、人が減っていき、スポーツをサポートする人もこれから減少してくるという中で、省力化の観点から発展の可能性を探っていったらどうかということ、まとめられるかと思ひます。

そこで千葉委員にお尋ねしたいのですが、先ほど指導者の専門性、それも、対象によつての専門性も含めてだと思ひますけれども、何かお考えございましたら、お願いいたします。

〔千葉委員〕

千葉です。よろしくお願ひします。私が常々思つてるのは、参加する側の問題ではなくて、福西委員が言われたように、いつの問題もやはり指導者の、言い方悪いですがレベルの低さに問題があると思ひんです。そこが全然重要視されていなくて、もともと自分がやつていた競技を引退してそのまま指導者になつてとか、別にそれが悪いとか言つてゐるわけではないんですけど、教育指導者としての最低限度の心得とか、対人に対して何を伝えたいとか、最低限度の教育を受けなくても、コーチにもなれるし指導者にもなれるんです。でもそれつて本当は一番大事なことで、スポーツの楽しみだとか、自信がなかつた人がそのスポーツに参加することによつて自信をつけて、また他のところにステップアップできるというのがすごく重要な部分なのにもかかわらず、まず一番最初の大事なハードルで、指導者がすごく理不尽で、きついかしんどいか楽しくないかかつていうことで、始めてみても面白くない楽しくない苦痛という人が多分結構いると思ひんです。だからその一番最初のステップのハードルをやつぱりすごく強化して、それは他の県も、日本が全然強化していない部分、重要視していない部分だと思ひんですけど、本当は一番大事な部分だと思ひんです。なので、本当に何かパトロールじゃないけど、小学校、中学校の部活だとか、また部活だけじゃなく、スポーツ施設のフィットネスでも指導員はいる。いろんなところに年齢やレベル関係なく、指導者というものはいる。そこを奈良県は、「いろんな人に一度参加してもらいたい、楽しんでもらいたい」つていううたい文句で良い指導者を増やしていきたい。質を高める、イコールスポーツをする人が増える、長く続けられるつてことだと思ひんです。だからスポーツをいっぱいしてほしいとか、いかにスポーツをする県民が増えるかとかいう問題以前の、一番大事なのが、良い指導者。まあ良い指導者つて何かわからないんですけど。理不尽だとか体罰だとか威圧だとか、いろいろあると思ひんですが、今問題になつてゐる根性論とか、昔ながらのやつが根づいてゐると思ひんです。だから時代に合つた、対人に対して人が伸びるといふ教育とかをできるような指導者をいっぱい増やしていくという、指導者を教育することがやはり必要だと思ひんです。でもそこつて全然されてない。少なくとも奈良県はそこを

強化していくということに力を入れてもいいし、そこに力入れていただきたい、と私は思っております。

そうすることによって、興味なかった人が口コミで、あそこすごく楽しいよ、やってみなにかという話にもなるし、スポーツを本格的にするつもりじゃなかったけど、始めてみたらずっと続けられるとか。すごく些細なことですけど、やはりそれが第一歩になると思うんです。でもそこがやっぱり整ってなくて、スポーツを始めてください、やってみてくださいと言われたところで、その環境が整ってなければ続けられないと思うし、興味も持たないと思うし、人は増えないと思うんです。だから、いつも思うんですけど、指導員の強化と言ったり言い方悪いですが、まともな人を育てて増やしてほしいって、ただただそこが願いです。以上です。

〔佐久間会長〕

はい。ありがとうございました。

人を伸ばす、そこを重要な観点として、指導者の問題というのを教えていただきました。そういった教育的視点から、特に学校のクラブも含めて、尾崎委員、県の文教くらし委員長をやっておられますが、お考えをお願いいたします。

〔尾崎委員〕

奈良県議会の文教くらし委員会の尾崎でございます。千葉さんのご意見は本当に最もだなと感じるところでございます。奈良県でスポーツ指導者の認証制度みたいなものも検討していったいいのかなと。そこで一定の勉強していただいた方々を優先して、地域のスポーツの指導者となっていただくというのも一つの方策かなと思いました。

また、国体の話をさせていただきたいんですが、奈良国体10年後にあります、議会でも知事とお話させていただいたんですが、少しでも多くの市町村を巻き込んでいく。これは前回のわかき国体の時も十分そういう理念でやっておられたとは思いますが。さらには先ほどからも議論ありますように、SNS等で、例えば好プレー、珍プレーはちょっとどうかと思うんですが、それらを公式サイトでどんどん発信していくことで、「あっ今国体やってるんだ」と。市町村の行政止まりになってはいけないと考えております。

一方でコロナ禍で、非常に地域の市民大会とかを簡単に、中止、延期っていうことになっていると思います。市町村長の判断で、情報が少ないのでどうしてもそういうふうな、予防的に措置をとっていかなければならない。例えばオープンスペースのグラウンドでの競技でも、とりあえず閉めとこう、やめとこう、というふうな判断になっておると思います。10年後の国体においても、それを目指して、いろいろオリンピックなんていうのもされておりますけども、10年後の国体においては、これぐらいの感染症の状況であっても、こういうやり方をすれば開催できるんだ、というような部分で、まさに想定外ではありませんので、十分そういうことも起こるんだっていうことを我々今経験させていただいておりますので、

この見地からも、簡単に中止、延期をしない、そのことも重要じゃないかなと思ってます。地域で、非常にそれについて、楽しみにされてる、頑張ってる皆さん方のポテンシャルを維持するためにも必要かなと思います。以上です。

〔佐久間会長〕

ありがとうございました。田中委員からは指導者の専門性ということで、特にけがの予防等も含めまして、スポーツ障害の現状と、それから指導者育成の観点からの、ご提言いただければありがたいと思います。田中委員、お願いいたします。

〔田中委員〕

はい、田中です。僕も国体にすごく期待してるんですね。前回の時にいっぱい選手の方が来て、残られて、奈良県のスポーツの指導者として残ってる。それがもうだんだん年代が経っているんで、減ってきてると思うんですね。だから今回も計画立てて、将来子どもたちの指導をしてくれるような人々をある程度リクルートできると、長きに渡って、奈良県を支えていただけるんじゃないかなと思います。

それと国体は個人的には、奈良医大って橿原にあるので、橿原市も国体のときにはそれなりのボリュームで注目を浴びると。だから医大の健康に関するコンテンツと、特に若い子らはもう、僕らが研修医の前回の時は全くスポーツ医学っていうのはなかったんです。それが、今回はみんな若者がスポーツ医学やりたいって入ってくるような、そういう時代になってる。多分確保する分には、10年後なので、いっぱい通っているんで、心配はしてない。だけど南の方って、どっちかというあんまり注目を浴びてなかったんで、それを契機に、橿原市は関空からも直結してますし、そこを伸ばしてもらおうと僕的には嬉しいなと感じます。あと奈良県スポーツ協会とかでも、検診とかの事業をやっていて、サポートいただきつつあって、奈良県内にはスポーツを目指すドクターは結構いて、これが300人規模の検診とかをやってるんです。だけど、問題はアスレティックトレーナーの方が少ないんです。外から来ていただいても結構なんですけど、奈良に住んでいるけども大阪で仕事してるとか。トータルでも二十数人しか、奈良県にはアスレティックトレーナーの人がいないので、そこが国体までの大きな課題かなと思います。以上です。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございました。先ほど尾崎委員の方から、指導者の認証制度という提言もありましたが、ただいまの話の中では、正式なアスレティックトレーナーが少ないという問題。こういったこともまた、養成という点では重要な課題だと思っております。スポーツ、これは特に、「誰でも」ということも、大きな柱となっているかと思うのですが、そういった点で、日本パラリンピアンズ協会副会長、また、本会の副会長をやっていただいております根木委員、何かご提言ありましたらお願いいたします。

〔根木副会長〕

はい。みなさんの話を聞いていると、しないとだめな、急務な課題が多くあるなと思います。今回、全国スポーツ大会の、10年先に向けての発言をと言われていたので、そこも考えていたんですけども、その前に、今までの公開議論で取りこぼしている、と言うとちょっとストレートすぎるんですが、全然進めていないところが結構見えてきていると思うんです。そこで、どこが最も出来ていなかったかということ、この短期間で何が出来るかということも挙げて、そこを徹底的にこの一年頑張ろうとやっていくのも一つなのかなと思います。あとは、前回の皆さんの発言、自分の発言をまとめているものをあらためて見ていて、まさしくそうだなということ、本当に課題で引き続きやらないとダメなことだなと思いました。

あと、10年先に全国スポーツ大会があることによって、大きい会議があつて、そこに向けて10年かけて奈良県が目指すものというのが出来るということは、すごくチャンスなのかなと思います。本当に今、オリンピック・パラリンピックというなかで、色んな風が吹いていて、僕もがつつり関わるので、苦しい気持ちもいっぱいあるんですが、今後スポーツ自体が社会でどうあるべきか、役割って言うことが重要になって、それをしっかり伝えていかないといけないと思います。オリンピックも、もともと世界平和というのをオリンピック憲章に挙げているし、パラリンピックのゴールというのは、インクルージョンな社会の創出なんですよね。国体自体も、スポーツ大会自体も、今スポーツ大会自体のあり方委員会っていうのもあってどんどん考えられていっているし、スポーツ自体も今、この現期のスポーツ基本計画がちょうど今年度で終わりです。2022年3月で終わり、2022年4月からは第3期で新たになる。今スポーツ庁では来年に向けて各団体のヒアリングをしたり、大きくまた5年かけて日本のスポーツをどうやっていくかということを議論していて、そこに参加させてもらっています。そういうのも含めてスポーツ大会に向けて、奈良県やそのスポーツ大会をどのようなものにしていくかをずっと考えて、ちょうど今、SDGsという言葉がどんどん出てきている。「スポーツ SDGs」って言い方の方がストレートでいいのかな。競技であったり環境であったりとか、ジェンダーであったり平等というところを明確に挙げているので、そこを目指すって言うのも一つなのかもしれない。10年後の大会に向けて、SDGsの17の項目の中で、特にこの数項目を取り入れて目指していくものを10年かけてするのも、すごくわかりやすく取り組めるのかなと思います。細かく一つずつ挙げていくと本当に山ほどやらないとダメな課題があるので、やるべきことは絶対やらないといけないと思うんだけど、ここの委員のみんなと話をしていくというのは、目指すものをしっかりと作るということが大切であると。SDGsというのを参考にするというふうに取り入れると、ヒットするのかなと思います。繰り返しになるけれども、朝原さんも言われていた10年後の大会がどんな風になるか。きっと今やっているような大会のかたちから絶対変わりますよね。スポーツの価値も、やっぱりどんどんどんどん求められてくるとは思うので、そこを見つめて考えていったらいいと思うし、千葉さんがというような指導者の育成なんて、本当に

今しないと、今育っている子どもたちのことを考えると、今日のこの後すぐにでもやっているとダメなこと、急務っていうものも並行してやっていくのが必要と、そんなふうに思いました。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございました。ご指摘にありました「スポーツ SDGs」っていうのは、言い換えれば、今まで言われていたスポーツ遺産とか、レガシーというものを永續させていくというかしっかりと継承させていくことにも繋がるのかと思います。こういった観点からもまた今後のあり方を考えていかなければいけないと思っております。お話の中に何回か出てまいりましたけども、スポーツの価値、これはそれぞれの立場によって若干違うかもしれませんが、事務局の方から配布された中でも、スポーツの社会的な価値ということも言われていますが、そういった点で実際スポーツを行う人、あるいは指導する人、支える方の立場から、アシックスの松下委員いかかでしょうか。

〔松下委員〕

はい。松下です。先ほどから色々お話聞かせていただきまして、特に私の感じるところでは、松永先生も仰いましたけども、デジタルテクノロジーというものをいかに活用できるかということが、一つのポイントであるなと感じます。また、個々の市民の方の行動をセンシングし、分析して、AI等のテクノロジーを使って行動予測を行い、それに対して、改善の指導をしていく、循環をさせていくというような、いわゆるスマートウェルネスシティ、スマートウェルネスタウンみたいなものを、検討していくべきなのではないのかと考えております。

それから同時に、やはり身体の健康という言葉でまとめると、どうしてもフィジカル的なところに集中しがちなので、スポーツはこの時代特にストレスを発散させるという意味において非常に重要だと思いますので、心の健康という部分を特に取り上げるべきなのかなと感じています。

あと最後に、スポーツを通じた「人づくり」というところ、先ほどあったコーチであるとかトレーナーの方であるとか、いわゆるケアをされる方々等の人材という話もありましたが、スポーツを通じてスポーツマンシップやフェアプレーという考え方を学んだ素晴らしい人材を育成していかなければいけない。それから、我々に関係しているところであれば、スポーツを通じて学んだこと、またそれを活用したスポーツマネージメント、これはチームやクラブを運営していくうえで、人材不足というのが昨今非常に問題になっております。また我々の近いところであれば、スポーツマーケティングですね。スポーツをどのようにマーケティングに活用していくかというところの勉強ができるような仕組みというの、一つには考えていくべきなのかなと感じております。私の方は以上です。ありがとうございました。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございました。「支える」側として、特に企業側の方の発言としまして、スポーツマーケティング、スポーツマネージメント等についてもお聞きしたいところでもあります。

ただいまのご発言、ご提言の中で、身体健康だけではなくて心の健康ということも出てまいりました。奈良女子大学の星野委員、スポーツの心理学的な関わりをご専門とされてますが、ご提言等ございましたらお願いいたします。

〔星野委員〕

はい。よろしく申し上げます。奈良女子大学の星野です。これまでのご検討の経緯はわかりませんが、私の方から3つほど世代に分けてお話しさせていただきます。

今回、コロナの時代で1年半ぐらい過ぎましたが、世界がすごく狭くなったなという印象を持ちます。世界の情報がリアルタイムで伝わってきて、そういうものにだんだん慣れてきて、学会でも色々な学会や講演会とかが手軽にオンデマンド、オンラインで手に入る。情報がすごく簡単に入る。そして、情報提供も促進されてオープンになってきたので、みなさんも仰ってましたけれども、色々情報があふれてきている。そこで、何かを選択すると、次はこれどうですかというような次行う行動まで予測されて提供される時代になってきて、すごくステレオタイプなパターン分けされた人間が、これからできてきていくのではないかと、恐ろしく思っています。すごく勉強する機会が増えて頭ばかりを使っているという印象を受けています。なので、時代のながれとしては避けられないですけれども、どんどんテクノロジーにシフトしていって、今後、こういう時代が数年続くと、子どもたちに目を向けると、身体感覚ってどうなっていくのだろうかと不安に思います。身体感覚なしに、頭ばかりを使っていくと、きっと誤った頭と心の関係、つまり頭と身体が統合されていない状態に近い将来くるのではないかと不安に思います。そういう意味で、身体体験・身体記憶に感動や喜びの体験を伴うように、また同時に恐怖の体験を通じた第六感的を養うことも大事ですが、「身体記憶と感動」を統合できるような環境づくりが今後さらに大切になってくると思います。奈良は自然がすごくたくさんありますので、豊かな奈良を利用して、郷土愛を育みつつ、身体を動かすことのできる仕組みづくり・場所づくりがあるとよいと思いました。

つぎに青年期です。青年期の学生さんの、コロナ禍での体力変化を見たところ、奈良女子大学の学生では、柔軟性がすごく低下しました。女性なので柔軟性だけはこれまで長けていたのですが、どうやらカチカチに凝り固まった身体になってしまっている印象を受けました。もちろん筋力や他の体力低下もみられ、体力がかなり落ちています。私自身は、剣道の学生連盟の仕事もしてまして、去年1年間全く大会運営ができませんでした。スポーツ文化がどんどん絶えていき、これからスポーツの価値が変わっていくのではないかとこのお話もありましたが、「在り方」も変わっていくのではないかと懸念しています。スポーツ文

化というものを絶やさないように、実体験を何とか守っていかないとはいけません。話は逸れますが、千葉先生も仰っていたように、大学生になってまで剣道続けられないという学生がいます。指導者がきつかった、稽古もきつかった。もう高校まででやり切ったと。そういう人が少なくなるように、生涯スポーツとして、ずっとスポーツ文化を自分の生活にとり入れておいてもらえるような人を育てたいという気持ちで、学連をサポートしています。

三つ目です。県のご要望として、一般の人にも目を向けてくださいということでしたので、高齢者さんに目を向けてお話しします。私の方では都市と川上村という吉野の村で、高齢者のQOLと体力の調査をしました。QOLを支えるものは何だろうというところで、やっぱり身体なんです。自分で自立して動ける人ほど、QOLが高いという結果が得られました。そして健康を育めるような身体を作るためにはどうしたらいいのかと考えた時に、ポジティブな心理面をとらえる「Well-being (ウェルビーイング)」を高く持っていただくためには、高齢者になって70代後半になってからではなく、青年期後半や壮年期である30代40代の人にもスポーツや運動を生活に取り入れるやすい環境づくりが大切です。こういう点に目を向けて、10年後、20年後のまちづくりをしていかれたらどうかと思いました。以上です。

〔佐久間会長〕

はい、ありがとうございます。特に最後の方の問題としましても、実態調査、そういったものを背景にしての提言なども非常に参考になるかと思っております。それと、先ほど松下委員のご発言の中にも出てまいりましたけども、スポーツマネジメントとかスポーツマーケティングとか、これからのスポーツで非常に重要な価値を持つてくると思うのですが、ご専門の、龍谷大学の松永先生、何かこのことについて少しコメントいただけますでしょうか。

〔松永委員〕

はい。松永です。大きな枠組になってしまうのですが、やはり産業界との繋がりが重要です。ICT、AIの話や、マネジメント、マーケティングのお話はもちろんですが、先ほどからの指導者の話や、国体のある10年後を起爆剤にといった話が出ていますが、やはり国体前から国体後にかけても指導者に奈良県に残って、引き続きスポーツ現場の指導に関わっていただくという仕組みづくりが重要です。多くの自治体が困っておられるのが、選手も指導者もそうなんですが、国体開催地域でしっかりと競技や指導を続け、生活ができる基盤や、指導が続けられる所属先の確保が難しい状況です。10年前から産業界も交えてしっかり仕組みを作っていくこと、つまり、奈良県のスポーツに継続的に関わっていただくための仕組みを作っていくというところもとても重要で、それもマネジメントの一つになると思います。

併せて、奈良県出身の子どもたちを国体に出場させるという、いわゆるスポーツタレント発掘事業という取り組みが、かなり前から全国的に自治体レベルで行われていると思いま

す。今の小学生がターゲットになりますが、この件についても奈良県さんがこの10年間をどう見据えていくのかということも重要です。奈良県出身のスポーツタレントの子どもを発掘し、10年間で育成していくのかどうか?という点です。

このように、奈良県さんとスポーツ協会およびスポーツ競技団体さん、そして総合型地域スポーツクラブやスポーツ産業界、さらにスポーツ以外の産業界との繋がりも重要です。冒頭では、計画の話をもとに地域間格差のお話をさせていただいたのですが、国体というキーワードでいくと、スポーツタレント発掘事業等の今後10年間の展開についての関連情報についてはこの審議会ではほとんど情報提供もいただけていないので、またお願いしたいです。さらに、仕組みというところで言いますと、経営人材やマネジメント人材も含めた人材の発掘と育成についても、国体が今後の展開のかなり大きなポイントになってくると思います。そのあたりも踏まえて、松下委員が先ほど仰ったマネジメントとマーケティングの観点は非常に重要になります。以上です。

〔佐久間会長〕

ありがとうございました。ご専門の立場から、今後10年間に向けて、どういうふうに対応していくのか、その中でも、その仕組みづくりの重要性をご指摘いただいたと思います。今まで色々な委員の方々からご発言いただきましたけれども、残り時間もあとわずかですので、何かどうしてもこれは言っておきたい。こういった提言、ぜひ、次に向けて欲しいとか、そういったことがございましたら、どなたでも結構ですので、ご発言をお願いいたします。

〔蝶間林委員〕

たびたびすみません。蝶間林です。

〔佐久間会長〕

はい。お願いいたします。

〔蝶間林委員〕

昔、日本テニス協会というところから公認指導員、公認が2級、1級とかですね、ライセンスを出していたのですが、今、千葉さんからのお話もあったように指導者の、この体系が、奈良県で独自にですね、奈良県の発効する指導員、という制度を作られてはどうかかなと思ったのですが、昔僕はテニス協会の関係でベルギーという国に視察に行ったことがあるんですが、あそこは人口1千万人で、ベルギーテニス協会に加盟すると年間20ドルぐらいで、年に何回か色んな広報がまわってきて、色んな交流が出来たんです。その奈良県版を作って、テニスじゃなくてスポーツ全般に関わって構わないですし、若干経費を取っていいと思うんですが、それに見合うだけのレスポンスが県のほうで与えられるよう

な制度を作られたらいいかなと今思いました。ご検討下さい。

〔佐久間会長〕

はい。ありがとうございました。10年後、令和13年の国体を目指して、その間に、様々な仕組みとしてやっていく。それがまた、新たなスポーツ推進計画にもつながっていくと思います。

「人づくり」、「組織づくり」、それから施設を含めた「環境づくり」、人為的な組織も含めた中で、いずれも一朝一夕に出来るものではないので、やはり、それなりの年数をかけていかなければいけないと思います。特に選手でしたら、発掘も重要ですし、さらにそれを養成していかなければいけない。私もだいぶ前ですがJOCの医科学委員で選手の発掘に携わった経験もあります。指導者についても、目に見えるかたちでの県独自の資格だとかご意見ございましたけれども、今後特に指導者が重要なんだということも踏まえて、教育分野の方々とも関係を深めていかなければいけないとも思います。中西委員、ご発言お願いします。

〔中西委員〕

よろしく願いいたします。

〔中西委員〕

初めて今回参加させていただきまして、ポーネルド代表中西と申します。

ご存じない方もいらっしゃると思いますので、ポーネルドについて簡単に紹介をさせていただきたいと思っております。

ポーネルドは、遊びを通して、子どもの健やかな成長に貢献することをめざし、1981年に設立いたしました。以来、40年間、「あそび」を通して子どもの健やかな成長に貢献することを目指し、次の3つの事業を行っております。まず、幼稚園や保育園、街の公園など、屋内外のあそび環境作り。次に、世界の大型遊具、教育玩具の輸入販売。三番目に、親子の室内あそび場の運営。

40年間、海外メーカーや国内外の研究者と協働して、子どもの「あそび」を追求してまいりました。その経験を踏まえ、考えを述べさせて頂きたいと思えます。

ご存じのとおり、日本の子どもの体力は低下しております。実は、世界でも30年も前から子どもの体力の低下が始まっています。例えば、既に、30年前にデンマークでは、世界でいち早く、国家プロジェクトとしてこの問題に取り組みました。子どもの体力の増強には、1日1時間、遊びながら体を動かすこと重要だという考えのもと、楽しく体を動かせる道具を開発するなどして対策に動きました。

実は随分前から日本でも子どもの体力も学力も低下が始まっています。私どもがご一緒させて頂いております山梨大学の中村和彦副学長が発表されている研究では、小学4年生の子どもの体力は実は25年前の幼稚園児と同じだと言われています。

この現状を何とか解決したいと考え、我々は「あそび」を提案するプレイリーダーを配置し、親子で楽しく体を動かせる施設である「キドキド」を2002年に開発いたしました。以来20年間、「キドキド」では毎年数百万人の親子が遊んでくれています。この施設で体験的に分かったことが2つございます。

まず、生まれながらにして、運動が嫌いな子どもはいないということです。子ども達は、楽しく体を動かせる環境があれば自らどんどん体を動かします。こちらのグラフは、先ほどの中村先生に「キドキド」の運動効果を検証して貰った結果です。

通常の保育園とキドキドで、同じ子ども10人にそれぞれ30分間遊んでもらい、比較をいたしました。その結果、大人が勝手に運動嫌いだとレッテルを貼った子もそうでない子も、みんな一様に体を動かしていました。環境さえ整っていれば、子ども達はみんな遊ぶんです。さらに保育園よりキドキドの方が、より多く体を動かしているということも分かりました、2つ目に、遊びは望ましい生活習慣に繋がるということです。

2011年、東日本大震災により福島県郡山市の子ども達も多くの影響を受けました、子ども達は外で遊べなくなりました。遊べないのでお腹が減らない。子ども達は夜も眠れない。それにより体の成長が遅れる。こういう現象が起こりました。我々は会社として何か出来ることがないかと考え、郡山市に屋内遊び場をプロデュースいたしました。このような様々なことをやってまいりました。奈良県の取組の中でも、いろいろな資料を読ませて頂きましたが、幼児運動プログラムの策定や普及をしておられると感じておりますが、我々の40年の経験を踏まえ、赤ちゃんから幼児までの子ども達の主体的な遊びを中心に据えることを提案したいと思います。その上で具体的には、赤ちゃんから小学生まで、発達に即して、子ども達が1日1時間楽しく遊びながら体を動かすことが出来る機能的な環境を整えること。そのために必要な条件を3つ提案いたします。一つ目に、遊ぶ時間の確保。二つ目に、子ども目線における、遊ぶ場所の整備。三つ目に、あそびのヒントを親子に与え、あそびを促すしかけ作り。例えば、プレイリーダーの配置などです。

以上3点の提案をもって、私の提案とさせていただきたいと思います。皆さんとちょっと違っているところは、子ども達が運動ということではなくて、1日1時間楽しく体を動かすというところは、我々のところと多少違っているところではないかというふうに思っております。(PCトラブルにより、一部資料にて補足)

〔佐久間会長〕

ありがとうございました。トラブルの発生で大変失礼致しました。申し訳ありません。また、早めにご意見を伺うべきところ、失礼致しました。

それでは、ちょっと時間がオーバーしてしまいました。何か特に、これだけは言っておきたいというようなことがございましたらご発言を御願います。無いようですので、本日の審議会はこれを持ちまして終了させていただきたいと思います。

皆様の貴重なご意見を頂戴いたしまして、今後また、新たな計画づくりが進むのではない

かと思っております。ありがとうございました。また今後ともよろしく願いいたします。  
それでは事務局にお返しいたします。

〔吉田部長〕

本日大変お忙しい中、どうもありがとうございました。また、私どもの不手際がございまして、委員の皆様方にはご迷惑をおかけしましたこと、お詫び申し上げます。申し訳ございませんでした。次回このようなことがないようにさせていただきますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

本日、様々な立場から貴重なご意見を賜りました。資料の中でもご説明をさせていただきましたが、スポーツ振興を知事部局で取り組みをさせていただいて、はや10年が過ぎました。その間、様々な取り組みをして参りました。現在もそれが形となって現れているものもいくつかございます。とはいえ、まだまだ、我々が取り組むべき課題が多いとも考えておりました。先程来何度も出てきておりますが、令和13年に奈良県での国体の開催が決まりました。国体に向けてだけではなく、国体が決まったことを機に、改めて、そこまでの間、どのように取り組んでいくのか、あるいは、その先どうしていくのかということ、今しっかりと考えていく必要があると思います。そういったことをしっかりと条例に謳うことができるか。奈良県のスポーツ振興の普遍的な取り組みをしっかりと条例に謳い、その条例をもとに、様々な取り組みをしっかりと行っていく、こういうことが必要かなと考えております。

本日は皆様からいただきましたご意見をもとに、再度我々の方で整理をさせていただきまして、次回もう一度皆様方にそういった考えをご提示しながら、改めてご意見を賜りたいと考えております。

本日は限られた時間でございましたが、本当に貴重なご意見ありがとうございました。また最後不手際がございまして、お詫び申し上げたいと思います。次回このようなことがないようにしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

以上の事項は、事実と相違ないことを証明する。

令和3年8月18日

議事録署名人

蝶間林 利男

印

議事録署名人

福西 達男

印

※署名・押印された原本は別途保管。